【静岡サレジオ幼稚園】

●2021.12.23 ふりかえり（先生３名＆園長先生／遠藤知里先生）

先生１：うちのクラスにいる子で、いつもは三輪車に乗ることが多くて、お友達のしていることに興味はあるけど、あんまり自分から行かない子がいたんですけど、エコエデュのスタッフさんが、クモをパッて取って、クモの足を広げて、「絶対噛まないから、お腹触ってごらん」って言ってくださって。私なんかは、えっ、ちょっとドキドキするって思って、子どもたちどんな反応なのかなって思ったら、そのいつも三輪車に乗っている、ちょっと消極的な男の子が一番にわぁって表情をして、お腹をふわふわって触ったのが、すごく、なんかこう、こういう表情するんだっていうのと、この子、生き物に興味があったんだなっていうことが分かって、そういう新しい発見があって。そのことをきっかけに、生き物を通してほかの友達との関わりだったりとかが増えていったらいいなあって、ちょっとあとのふりかえりで思ったんですけど。

　私たちが思っていた以上にわぁっていう表情が多くて、私もびっくりしたというか、私もクモのお腹触ったんですけど、触ったら冷たくて。ひいていた子もいましたけど、いい経験ができたかなっていうふうに思いました。

――：お腹を触るっていうのはさすがにないと思うのですけど、普段の保育の中で例えばクモを見つけたりとか、そういうことはありますか？

先生１：部屋にいるハエトリグモとかはあるかな。あと、黒と黄色のお腹のクモとか、お散歩とかで「あ、クモいるね」っていうのはあるかな。学園内の「サレジオの森」にお散

歩にいくことがよくあって。ちょっと木がいっぱい生えていて、果実だったりとかがあるんですけど。そういうところでクモだったり、園庭にいるダンゴムシだったり、カタツムリだったり、いろんな生き物を見たり、触れるというのはあるのですけど。

――：そういう機会はあるけど、その子はそこまで興味示さなかったのですね？

先生１：あまり、そうなんですよね。カタツムリがいたときに「カタツムリだね」とは言っても、触ろうとしたりはなかったです。私もうまくこう、投げかけみたいのができてなかったのかなと思うんですけど。

――：いやー、でも、うれしいですね。

先生１：そうですね。はい、うれしい発見でした。（笑）

――：ありがとうございます。

先生２：うちのクラスでも、やっぱり自然にあんまり興味を示さなかったり、そもそもお散歩に行くのが好きじゃなくて、「お散歩に行くよりビーズとかで遊んでるほうがいいよー」って言う子も何人かいたんですけど、そういう子も、すごい、遊木の森に行ったときは、目を輝かせながら、友達と会話も楽しみながら、いろんなものを触ったり、匂いを嗅いだりしていて、幼稚園から帰ってきたあとも、ほんとに自然、お花とか虫を探したりとか、どんぐりを探したり、そういうのをやりたいっていう気持ちがすごい強くなって、自分のほうから「先生、お散歩行こうよ」って言ってくれるようになったのがすごいうれしくて。

　あとは、いつも遠慮して一歩引いたところから見ている子も、遊木の森ではすごい自分から見に行ったりとか、自分から触りに行ったりとか、保育者が声をかけなくても、自分から興味を示して行動したっていう姿がすごい見られたので、成長を感じました。

――：当日、雨だったのは、あんまり子どもたち、気にしていなかった感じですか？

先生２：うん。それは…。ちょっと、「ああ、雨…」みたいな感じではあったんですけど、でも、遊木の森で１時間探検して、子どもたちの中で、あ、雨の日もお外に出れるんだとか、雨の日に出たらこういう楽しいことがあるんだというのをちょっとずつ気づき始めたのかなっていうのはなんか感じて。「楽しかったー」って幼稚園から帰ってきたあともすごい言っていて、「トトロの道もすごかったー。トトロいたよ！」ってすごい楽しそうに、そのときも目を輝かせながら私に話をしてくれたので、それはすごい印象的でした。

先生１：葉っぱを持って歩いていた子がいて、結構大きな葉っぱなんですけど、ずっと持っていて、ちょっと坂の斜面を歩くところだったので、手をつけないかな、危ないかなと思って、「葉っぱ、持ってようか」って声をかけたんですよ。そうしたら、「傘だよ！」って言って。「あ、そうだね。雨が降ってるもんね」って言って見守りつつ、斜面を葉っぱを持ったまま上がったんですけど。

やっぱりこう、雨が降ってなかったら、この葉っぱが傘になるとか、そういう発想みたいなのもきっと出なかったのかなと思うと、雨は雨ですごくいろんな発想が出てきたというか、女の子たちもシダの大きなのを満足気に持って、「先生、傘見つけたー！」って、私、男の子チームにいたので知らなかったんですけど、「先生、傘見つけたー！」って言って、それをみんなでさして、幼稚園に着いてからもこうやってする感じだったので。なんかそういう雨ならではの発想っていうのも子どもたちの中から聞けたので、すごく面白いなっていうふうに、雨は雨で、ちょっと寒かったんですけど、楽しめたっていうふうには思います。

園長先生：晴れだったら、また違ったかもしれませんね。

先生１：晴れた日にまた行ってみたいです。晴れた日はまた違う表情というか、あるんだろうなって。

先生２：やっぱり雨だと、外に出なかったりとかするんですけど。やろうと思えばできるとは思うんですけど、幼稚園では今までできなかったことが、遊木の森でできたということが、子どもたちにとっても、私にとってもすごいいい経験になったなって思います。

――： 幼稚園で雨の中で遊ばないっていうのは、やっぱり、そういう方針みたいなものがあるのでしょうか？アンケートでお聞きした他の幼稚園や保育園でも、雨の中で遊ぶところはほとんどありませんでした。

園長先生：そうですね、雨の中ではほとんど遊ばないですね。年長の先生なんかは、傘と長靴を持ってきてもらって、雨の散歩をやっているクラスもあるんですけど、基本、出ないです。

先生１：えっ、雨でも外に出ていいの？っていう感じですね。

園長先生：それによって発達にプラスになっていく場合と、体調を崩してしまう場合があるので、表裏一体ですね。だから、今回は特別な場所に行った場面で、たまたま降ってきたということですね。

――：いやー、そんな中で来ていただいて、改めてありがとうございます。

園長先生：いやいや。だけど、私たちも雨じゃないことを祈ったけど。ああいう大自然だったらもう活発に動いてほしいっていう思いがあるから、レインコート着させちゃうと、視野も狭くなる。だから、着ないでいきたいっていう思いだったけど、バーっと降ってきてしまって。

――：（笑）
園長先生：体力があればね、「ちょっとぐらいの雨でも行っちゃおう行っちゃおう」って言えるところを、まだ３歳だと…、ね。
先生１：なかなか園外保育に行けてなくて。今年の 10 月に初めて、保護者の方と一緒に日本平動物園に行ったんですけど、子どもたちだけで園外保育に行けたのは遊木の森が初めてで。
――：（笑）それであの雨。
先生１：そう。初めて歩く雨の中って感じでした。（笑）
先生２：人生初ですよね。
先生１：そうですね。（笑）
――：（笑）それであれだけ楽しんでくれるって。
先生２：すごいです。
園長先生：行く前から、もう、みんな楽しみにしてましたので。バスにみんなで乗るっていうのも初めてだったので。
――：そこから？（笑）
園長先生：ほんとに、子どもたちは楽しかったと思います、絶対に。

――：今年の園の活動は、コロナの影響で変更が多かったのでしょうか？
先生１：外出自粛になって、お散歩やドングリ拾いの予定や、運動会もずれたりとか、コロナの関係でずっと延びて。外に出られなかったので体力も戻ってなくて、体力の回復ぐあいを見ていたら予定が遅れていった感じです。

園長先生：エコエデュさんのほうは、どうして３歳児プログラムなのでしたっけ？　５歳じゃなくて。
遠藤先生：そうなんですよ。割と年長さんからっていうところが多いのですけれども。自然の中でいろんな体験をするということが、歩けるようになった年齢の頃からできるとよいのではないかという話が最近多くなっていまして。今回のモデルプログラムでは、１歳さんと２歳さんが来てくれて。サレジオさんが３歳さんで一番大きいです。
園長先生：一番大きい？（笑）あれでも？
遠藤先生：うん、そうなんです。

園長先生：きっとあれでしょうね、園で生き物に出会うのと、ほんとの自然の中の生き物に出会うのでは違うんじゃないですかね。というのは、この先生（先生１）はすごく生き物好きなんですよ。

遠藤先生：そうなんですね！
園長先生：うん。ほんとにこう、何でもかんでも触っちゃって大丈夫？という感じの。
――：へえー。すごい！
先生１：詳しいわけではないんですけど。
園長先生：うん。でも、好きなんですよね。
先生１：そう。
園長先生：だから、それも一つの環境で大きいんだけど。先生と一緒にクモやキノコを見ると、「ああ、キノコだ」って、「クモだ」ってなるんだけど、やっぱり自然の中にあるキノコとクモでは違うのかなって。たぶん幼稚園でクモが出て、「触ってごらんよ、大丈夫だよ」って先生が言ったとしても、もしかしたら触らなかったんじゃないかなって思います。
――：そうですね。
園長先生：たぶんですよ、そういうふうに置き換えると、あの自然の中だから、こうして大丈夫だよって、ほんとに大丈夫だよっていう安心感が伝わったんですね。だから、触ったんだと思うんですけど。その環境はやっぱり大きいんだろうなと思います。
先生１：こんなにちっちゃいハエトリグモでも、「先生、怖い」って言ってる子が、遊木の森でクモを見たときは、「わぁ！」って。
――：へえー。（笑）そんなに違う。
先生１：はい、違いましたよ。やっぱり自然の中で、園長先生も言ったみたいに、そういうの、やっぱりあるのかなって今すごい話を聞いてて思いました。
園長先生：伸び伸びしてましたもんね、それは。

先生３：私のクラスで、１人、キノコに興味を持っていて、おうちでもキノコ図鑑を買ってもらったようで、「何とか何とかキノコ知ってる？」とか言っている子がいるのですけど。その子がこの日に見つけたんですよね、キノコを。それで、「キノコ」って言ったので、みんなで一緒に見て、それで、「これ、何キノコだろうね」って私がつぶやいたら、その子が「サルノコシカケって言うんだよ」って言って。
――：すごーい。
先生３：しかも、当たり前のようにサラッと言ったんですよ。それをエコエデュのスタッフさんが拾ってくださって、「なんで知ってるの？」ってすごい驚いていて、「図鑑に載ってたんだよ」って得意気な表情をしていて。それがちょっと自信になったのか分からないですけど、そのあともキノコをその子はすごい発見していて、「みんな来て！」みたいな、「見て、見て。あったよ！」とか、共有するというか、そういう姿が見られたのと。なんかこう、今までは図鑑とか本とかで見るとかだけだったので、実際に見るって、なかなかないと思いますので、実物を確かめられて、もっとさらにキノコへの興味が深まったように感じて、帰ってきてからも、隣のクラスにあった本とかを見てて。

先生１：私のクラスの男の子チームで、ものすごい珍しいキノコを見つけた子がいて。スタッフさんもすごい！って、とてもびっくりされていて、子どもたちもジーッと見て、でも、何のキノコか分からなくて、その写真をクラスで貼って、みんなで何かなって言って、図鑑を見て、いろいろやったんですけど、中学・高校に理科の先生がいらっしゃるので、「みんなで聞きにいこう」なんて言いながら行けずに終わってしまったんですけど。

　それで、さっきの男の子がうちのクラスにふらーっと来て、「キノコの図鑑がある」って、まずキノコの図鑑を発見し、その壁に貼ってあった写真を見て、「あれはスッポンダケだよね」ってサラッと言って、「えっ？　もう一回言って」って言って、それをなんかこう分かっているような感じで。

――：へえー。

先生１：うちのクラスの子どもたちも、「へえー！」って。私も一緒に何だろうなっていうので、ネットでちょっと調べても、キノコって難しいじゃないですか。でも、その子が言っていたのが、すごいなって思ったし、それをなんかこう、本で見ているものを実際に見て、その図鑑のものと実際のものが結びつくのも結構すごいことなのかなって思ったりしたんですけど。

先生３：なんか、もう、この名前が正しかったのかどうかは分からないんですけど、それでもその子にとっては、それと結び付けて考えたとか、あれじゃないかなと考えたっていうのが、すごいこう、記憶力もすごいし、考える力もすごいなって、私自身、驚かされて。

――：うんうん。

先生３：ちょっと脱線になっちゃうんですけど、さらにキノコに興味がわいて、お母さんに聞いたら、新しい給食の袋もキノコにしたそうで。いろんな種類のキノコがあったらしいけど、その子が選んだのは、かわいいのとかじゃなくて、リアルなキノコだったという。たぶん新学期に持ってくるのかなあって、楽しみにしてます。

一同：（笑）

先生３：もう、完全に影響がどんどん広がっているっていうのは、もうね。キノコを食べるのも好きって言っていました。

園長先生：ここのクラス面白くて、ニュースで軽石が流れてきた時期あるじゃないですか。

遠藤先生：はいはい。

先生３：大人が話してたのを聞いてたみたいで、軽石か分かんないんですけど、石を見つけて「軽石があった！」って言って、わざわざ。

一同：（笑）

先生３：「これってどこにあったの？」って聞いたら、「あそこにあったんだけど、日本海から来たのかな」って。

一同：（笑）

先生３：なんかこう、私もその表情から「違うよ」とは言えず、「ほんとだね。こっちにもあったね！」って言っちゃいました。
一同：（笑）

園長先生：とても面白いでしょう、ここのクラスの女の子たち。男子も独特だけど、女子も面白くて、最高でしたね。だから、だからっていうわけじゃないけど、モデルプログラムの日にすごい走り回っちゃって言うことときかなかったのは、たぶんここの女子なんですよ。（笑）
――：ああー。（笑）
先生３：うちのクラス、すごく女子がしっかりしているって事前にお電話で伝えたんですけど、なんか当日、あれ、ちょっとって。
――：あっ（笑）
園長先生：あれあれって。テンション上がっちゃったのかもしれないのですけど。
先生３：すごく楽しくなっちゃってね。そうだったと思います。
先生１：集まらなかったね。
――：（笑）
園長先生：もう時間が経つにつれ、興味があるほうに行っちゃうもんだから、たぶんスタッフの方々も、「先生、言うこと聞いてくれません」って、「あ、ごめんなさい」みたいな。（笑）見るもの、見るもの、「えっ、あの花は何だ？」みたいな感じで走っていっちゃったり、「あそこのトンネルは何だ？」「ちょっと待って、順番！」みたいな。
一同：（笑）
園長先生：もちろんね、よしにしたいのは山々だけど、スタッフの人たちの説明も聞かず、我が道を行く。そして、危険性は全然考えてない。もうほんとにどうしようかなっていうところで、そのまましたいとは思いつつ、「戻りなさい！」って言うんだけど、聞かないみたいな。
――：（笑）
園長先生：誰も人の話を聞かない。
――：ああー。普段よりはっちゃけてた感じですか？
園長先生：感じ、どう？
先生１：とても…。
先生２：はい。
先生１：はっちゃけてた。

――：(笑)

園長先生：(笑) 解放感満載。

先生３：いつもよりもわちゃわちゃしてましたけど、子どもたちはたぶん楽しかったですよね。

園長先生：うん、うん。ほんと、解放されたんだと思いますよねー。

安心できる人たちが箇所箇所にはいてくれるから、大丈夫なんだ、ここはっていう安心感もあるし。

先生２：なんか、周り見なかったりして。

――：(笑) ああー。

園長先生：「言うこと聞いて。話してるから」みたいな、そういうことも言っちゃう自分もありましたけれども。それだけ興味を自分で示していけるっていうことが、やっぱうれしいかなって。「言うこと聞きなさい」って言われるぐらいね、注意されるぐらい自分で自発的に行動できるっていうことは、とてもいいことかなと思いますけどね。

でも、そうやって声を先生たちが拾えるから、なおのことそれが発展していくし。楽しいんだって受け止められるから。

――：ほんとに先生方が一緒に楽しんでくださっていたから、それはやっぱりうれしかったですね。

園長先生：喜んだのは先生じゃないでしょうか。

先生２：もう楽しみで、わくわくで。

一同：(笑)

園長先生：この先生（先生２）は、大学の研究も自然の環境で。

――：えっ。

先生２：初めて保育実習に行った園が、ほんとに小さくて、園庭もほんとに狭くって自然がないみたいな感じで、子どもたちはいつ自然に触れるのかなっていう疑問を持って。夏は最近、暑いじゃないですか、公園にもあんまり多く遊びに行けないんで、部屋の中で

虫とかを飼ったら、子どもたちも自然に触れ合う機会が増えて、身に付く能力があるんじゃないかということで、モンシロチョウを卵から年少さんと一緒に飼ったんですよ。

――：すごーい。

先生２：その成長を観察して触れてみて、卒論を書きました。

園長先生：でも、先生のそういう好きっていうのを活かすのは、すごいなって。だから、ほかの先生もそうですけど、ビオトープを今、考えているんですね。

――：すごーい。

園長先生：もう言い出して、そして生物の先生を巻き込んでやろうねって。

先生２：生物の先生が、前にやった研究みたいなののところに、子どもたちと池を掘ったって書いてあって、「年長さんとやりたいよね」みたいに言っていたんですけど。難しかったりもするのかもしれないんですけど、また新しい子どもたちの発見だったりとか、育ちにつながっていくんだろうなと思って、それで考えてみています。

園長先生：遊木の森のような環境が常にあれば、ほんとはいいんだとは思うし、そう思う反面、やっぱり運動会とか行事をしなければならない、ここでやることが多い環境にあるもので、どうしてもそれを全部叶えるわけにはいかなくて。だったら、じゃあ、一部でやってみようかっていう話が出て、なんかね。

それで、何だっけ、環境学博士。

先生２：こども環境管理士っていうのがあって。

園長先生：そこまでにも話が波及したんですけど、ちょっとまだ今、止まっちゃってる。

先生２：そう。結局、時間がなくて

【サレジオ幼稚園園庭とサレジオの森】

先生２：大学の頃に、ビオトープ管理士って言って、こども環境管理士よりもうちょっと難しいものに挑戦をしたんですけど、それもやっぱり難しくて、結局は受からなかったんですけど。とても数カ月じゃ難しいですよってなっちゃって。

――：なんかその過程を一緒に見ていたいですね。

遠藤先生：うん。そうかもしれない。ほんのちょっとした水たまり程度の池であっても、鳥とか、あっという間にたぶん来るので、足跡がついていたりとか。そしたらもう感動で

すよね。
園長先生：年長さんも、今、園庭がね、芝生なんですよ。だから、ボコボコ穴が空くんです。で、もう何だろう、何だろうってなったんだけど、ミミズの穴だったんです。
遠藤先生：ミミズ？　へえー。
園長先生：用務員さんが教えてくれたのが、ミミズの穴。
先生２：雨上がりに、こう、テラスにミミズがいっぱい出てきちゃって。
――：面白い。（笑）

遠藤先生：もうすでに生き物が集まってる。
――：ねえ。うん、それだけでも面白いですよね。
先生２：年長のクラスの担任だったときに、まだそんなに園庭に鳥、今、最近、多いじゃないですか、カラスとかがすごい、そういうところが多いんですけど。あのときはあまり鳥いなくて。なんか、『とりのえほん』っていう本があるんですけど、それを子どもたちが発見して「私、鳥を呼びたい」って言って、その本に「みかんを置いておくと、みかんを食べに来る」ってあって、「じゃあ、みかんを置いてみよう」って、みかんを置いて、見ているときはやっぱ来なくて。なんか、ヒマワリの種はどうかみたいな、ヒマワリの種置いたりとかして、ちょっとした池でも鳥が水飲みにくるって聞いて、ここに水たまりをつくればよかったんだなって、今ちょっと思ったんですけど。でも、子どもたちも、生き物を直接見て、考える機会があるのはいいなと思ったり。
――：ほんとですね。
先生２：うんうん。だからこう、きっと、私たちが気づくよりも子どもたちのほうが先に、そういう足跡だったりとか、そういうのを気づくのかなあと思うと、早くつくりたくなっちゃった。
遠藤先生：そうそうそう。あのね、見てると、鳥来ないんですよ、人間がいると。なので、ハイドって言うんですけど、なんかね、人間が隠れて、そこから覗くみたいな、壁とかみたいにすると、ちょっとわくわくするし。見てないときには来てるかもしれないので。
先生２：ああ、なるほど。
遠藤先生：みかん、楽しいですね。私もやりますよ。メジロが来ます。
複数：へえー。

園長先生：ハクビシンも来ちゃったり。
遠藤先生：そうなんですね。
園長先生：学園内にね。
遠藤先生：意外といるんですね、この辺。
先生２：うん。幼稚園の柿の木に、しっぽが白と茶色の生き物が登っているのを見ました。夜帰るときに、カサカサって音がして、柿の木見たら登ってて。

園長先生：用務員さんっていう人、ちょっと今は辞めちゃったんですけどね、すごいいい味を出していて。ハチを捕りにきてくれたら、ハチ食べちゃったりとか。

遠藤先生：えーっ。（笑）すごいですね。

――：へえー。

先生２：はい。ハチの子食べる？って言われました。

園長先生：ほんとにいい味出して。

先生２：甘かったです。

園長先生：一年通して、いろんな実を食べたりとか、トンボや鳥、ハチの巣をこうコレクションして子どもたちに見せてくれたり、いろいろやってくれてたね。ヘビがいたって言ったら喜んで捕りに来たりとかね。

園長先生：ほんとにそれも、先生たちがきっかけをつくることもいっぱいあるから。やっぱりそういうことに目を向けない限り、知らないで過ぎちゃうんだけども、いい経験は必要ですよね。本当は、この子たちが連続して遊木の森へ行けたらいいんだろうなあと思いますよね。

　そんなしょっちゅうではなくても、もう一回違った日に経験することによって、また違う発見に気づくと、自主性っていうか、前のめりなところが出てくるんじゃないかなと思うと、ほんとはね、月に１回でも２カ月に１回でも、そういうのを組めるといいなと思うのですよね。

先生２：これ何？っていう発見が増えたというか、知らなかったことを知ることの楽しさだったりとか、正解が分からなくとも、ああだこうだ言うその会話だったりとか、やり取りとかっていうのも、なんかこう、ちょっとずつ楽しくなってきているのかなっていうふうに思って、定期的にしていくと、またそういった力とか、そういったこともまた伸びていくのかなっていうふうに。

先生１：私のクラスも、その「知りたい」っていう気持ちがすごい強くなったなっていうのは、すごい思っていて。なんか、遊木の森に行った帰りのバスの中で、うちのクラスの男の子が、バスの席の前に持つ取っ手があるんですけど、「これは何でできてるんだろう」って、叩いて、「叩いて音を聞いてみよう」って言って、トントンってやって、「あっ、これは硬い。鉄でできてる」って言って、鉄じゃないですけど、でも、「もっと鉄じゃなくて、鉄のほかにも硬いのあるんじゃないかなあ」みたいな声掛けはしたんですけど、彼の中ではもう「鉄だ」っていう答えに達して。

　遊木の森で触ってみたり、匂いを嗅いでみたり、音を聞いてみたりっていうのが、自然物じゃなくても、ほかの場面でも生きてきて、家の中、おうちの中で、これを知りたいから、どうすれば知れるかなっていう知る術みたいなのを、遊木の森でもすごい彼なりに学んできたのかなっていうのはすごい感じました。

――：いやー、すごいですね。

遠藤先生：そうですね。この時期ってすごくそういう力が伸びて、例えば、キノコも、本物のこれだ！みたいな。たぶん、もっと小っちゃい人たちは、今見ているキノコはこれっていうことなんだけど、こっちとこれは同じだとか、こうだからこうだみたいな。たぶんそういうふうに考えられるようになってくるので、どんどんいろんなことを試して、必ずしも合ってないんですけど、でも、合ってなくても自分なりの考えの筋道の軸になるようなものだって思って、なんかね、いいですね。

――：ねえ、うん。

遠藤先生：それがすてきっていう。（笑）

――：ねえ、ほんと。すごい。ねえ、うん。

先生２：ほんとに、五感を使うって大事だなってすごい思いました。スタッフさんの発言だとか、「それ触ってみて」とか、「裏はどう、葉っぱの裏は触ってみたらどんな感じ？」って聞いたりとか、やっぱり子どもたちに気づいてほしいことを「こうだよ」って言っちゃうんじゃなくて、その気づくまでの投げかけ方っていうのを、あらためて、あ、そうだな、そうだなって思いながら私も学ばせていただいて。ついついもう、「こうやってこうやって」みたいな感じで、時間に追われちゃうとなるんですけど。子どもが考えるとか、子どもが感じることがやっぱり大事だなって思いました。

味覚とか今回できなかったですけど、冬イチゴを食べれるんだよって教えてくださって、子どもたち、手が伸びて。（笑）違う男の子が、また別の赤い実を持っていて、これが食べれると思ったみたいで、口に入れそうになって。

――：ああー。

先生２：だから、なんかこう、食べてみたいなって、私自身もそういう経験をさせてあげたいなと思ったんですけど。ちょっと今回しなかったんですけど。五感を使うことで、体に入っていくというか、そういう経験ってすごく大事だなっていうふうに思いました。

やっぱこう、普段触ることをしていないご家庭なのかなという感じの子もやっぱりいて、こう、最初はドキドキする子もいるんですけど。でも、遊木の森でのこの経験を通して、すごいいろんな葉っぱを拾ってきたりとか、ちょっとこう、躊躇なく、いろん

なものに触れてみたり、そういう関わりというのも増えてるかなというふうに思います。

先生３：普段はあまり植物とか興味がなさそうな男の子がいて、その子が溝のところに落ちてる、なんか、丸い実で、枝がこう出てるような、ほんと、さくらんぼに見えたんですけれども、それを拾ってきて、「これが落ちてた」って言って、「何だろうね、これ」って言ったら、「さくらんぼだよ」って言ったんですけど。「どこにあったの？」って言ったら、「そこだよ」って言って案内してくれて、「なんでここに落ちてるんだろうね」って言ったら、こうやって上見たんですよ。

――：おー。

先生３：そのとき、なんか、あ、分かってると思って、一緒に「この木かな。この木かな」って言って、ちょっと別の木を指してたこともあったんですけど、でも、なんかこう、その子の、新しい発見なのかなって思って、あんまり植物に興味ないかなと思ってた子でもそういう発言があったので、それがきっかけなのかなって思って、そういうのもありました。

――：ありがとうございます。正直言って、１時間の体験でどこまで変化が出るんだろうっ心配だったのですけど、ここまで、先生方が見てくださってっているのがすごいうれしいですね、やっぱり。

遠藤先生：ほんとに、そう、自然環境もとても大切であり、かつ、それってキャッチしてくださる先生たちの感性っていう、そういう環境が両方あってのこういうことだなっていうのを、ほんとにあらためて思いました。ぜひね、また。ほんとに３歳でこういう生活ができていると、もうずっとこれが続く、もう連続のところに、年中、年長ってこう盛り上がっていくので、とっても楽しみです。たぶん年長になる頃にはビオトープも。

一同：（笑）

先生１：できて。

遠藤先生：できて。ほんとに話を聞いていて、人生で初めて雨の中出掛けて、３歳のお子さんって初めてのことからのその次がやっぱりすごいなあと。それがいっぱいあることで、これ何？これ何？ってなったりとか、つながっていくっていうのをすごく感じさせられまして、３歳児、面白い、すごいって思いました。

――：ねえ、ほんとにすごい。

遠藤先生：うんうん。

先生１：ありがとうございました。

園長先生：楽しい思いをさせてもらって、先生たちも。

先生２：楽しかったです。

――：（笑）ありがとうございました。